
愛色蝶々

琉珂

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛色蝶々

【Nコード】

N6872A

【作者名】

琉珂

【あらすじ】

君はもうすぐいなくなる。君の色と僕の色。混ぜ合わせた色は一体何色になるのだろう。

病院のベッドの上で君が座っている。

もうすっかり着慣れたパジャマの青色は随分と薄くなってしまうていた。

「晶」

君の声が僕を呼ぶ。

とても愛しそうに、幸せそうに。

「何考えてるの？」

微笑みながら僕の顔を覗き込んできた。

「優のことだよ」

僕も微笑み返す。

「優と一緒にいるんだから、優以外の事考えるわけないだろ？」

答えると、君はふふふつと嬉しそうに笑った。

「それもそうだね」

控えめに胸に手を当てて、歌うように僕に語りかける。

「あたしも晶の事しか考えられないよ」

何だかバカップルみたい、と君はまた笑った。
僕はなんだよー、と頬を膨らませる。

別にバカップルだっていいじゃないか。
それだけ幸せなんだから。

「そういえば秋坂先生結婚するらしいよ」

穏やかに流れる時間の中、僕はふと口を開いた。
君は軽く考えるように遠くを見つめた。

「秋坂先生って、数学の？」

「そうそう、いつも緑のネクタイしてた」

「へー、そうなんだ。相手は？」

「国語の林先生だつてよ」

「林先生まだ独身だつたんだね」

「や、バツーらしい」

「じゃあ再婚かー」

君は自分の長い髪をいじりながら、窓枠に切り取られた景色に目を
向けた。

僕もつられて視線を向ける。

水色の蝶々が一匹、ふわふわと浮かんでいた。

そしてそのすぐ横には、黒い蝶々がぱたと飛んでいた。
まるで水色の蝶々を守っているみたいだ。

「いいねえ」

君が独り言のように呟く。

向こうを向いたままだったので、どんな表情をしてるかは分からなかった。

「何が？」

僕は聞き返す。

「……結婚」

君はそう返した。

「あたしもしたかったな」

「ならすればいいだろ」

「相手がいないもん」

「僕がいる」

「晶はまだ十七歳でしょ」

「あと四カ月で、十八歳だよ」

口に出してから、僕ははっとした。

僕は今、絶対に言わないと決めていた言葉を言ってしまったんだ。

「……四カ月は、待てないかな」

ああ。

君の辛そうな顔。

そんな顔しないで。

でも、そうさせてしまったのは他ならぬ僕。

「晶、ごめんね？」

謝らないといけないのは君じゃないのに。

「あたしなんか好きにならなければ良かったのにね」

違う、違う、違う。

僕は君にそんなことを言わせたくて一緒にいるんじゃないのに。

「優……」

全部伝えたいのに、言葉にならない。

なんて情けないんだろう。

僕は君に残られた時間を笑顔でいっぱいにしたいだけなんだ。
黒い学制服越しに自分の手首を掴んで、顔をあげる。

「僕がこんなに好きになれるのは、後にも先にも優だけだよ」

まだ十数年しか生きてない若造がなんて思わないでくれよ。

僕の言葉に嘘は一つもないさ。

君という全てが真実だから。

「晶……」

「目、閉じて？」

君は何か言い掛けたが、僕が言ったのでそつと瞼を下ろした。君の白い掌に僕の掌を重ねる。

そして顔を近付けて、その唇にやわらかくキスをした。触れるだけの、幼いキスを。

君は目を細めてクスクスと笑い声を漏らす。

「何」

「んー、何か、幸せかも」

僕はまたキスを一つ落とした。

「かも、じゃないだろ」

「……うん、幸せ」

三度目のキス。

あまりの幸福に酔い痴れそうになる。

けれど、別れの時は確かに近づいてきているんだ。

足音をたてて、ゆっくりと。

僕は泣きたくなった。

でも、泣かない。

愛しくてたまらない君が隣にいる。

その何処に悲しまなくてはならない理由が？

別に偽善で君と手を繋ぐわけでも、君と口付けを交わすわけでもない。

だからってこれを純愛と呼んで良いのかも分からない。

ただ一つ言えるのは。

「病めるときも、健やかなるときも、君に永遠の愛を誓います」

例えば君が目の前からいなくなったとしても、だよ？

ただ、君を愛してるから。

（後書き）

一読ありがとうございます。今回は純愛をテーマに書かせて頂きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6872a/>

愛色蝶々

2010年10月9日11時00分発行